

帝都地下迷宮

中山七里

最終回

3

地下鉄の出入り口が警官によって封鎖されている——マスターからもたらされた知らせは小日向たちを更に窮地きゆうちに立たせるものだった。輝美が情報を流していたとすれば「エクスプローラー」たちは全員面が割れていると考えた方がいい。

出入口を封鎖されれば、地下迷宮は巨大な密室と同じだ。博物館動物園駅から動けないとなれば袋のネズミではないか。

「どうするのよ、小日向さん」

地下住人の香澄は、現在置かれている状況の危うさを知っている。小日向の袖を引っ張り、子供のように怯えている。

「公安部はこの駅も知っておるのかな」

久ジイも不安そうにこぼす。小日向の知っていることなら当然公安部も知っている。自分は思い上がったというより他にない。

だが久ジイの発言が小日向のアイデアに水を差すものではないことも分かっている。久ジイは最悪の事態をあえて口にする事で皆の覚悟を促すつもりなのだ。

「久ジイ。あなたがそんな悲観的なことを言っただうするんですか」「いやな、間宮先生。同じ捕まるにしても最後まで抵抗するのか、それともこちらに怪我人が出ないようにおとなしくした方がいいのか。ここは思案の為所しどころでな」

久ジイは既に撤退戦を考えている。これが老練なる者と若輩者じやくはいものの違いなのだろうと思う。小日向は何とか打開策はないかと考えてみるが、三十余名の移動先は他に思いつかない。鉄オタ仲間てつおたは神奈川方面まで考えてみると言ってくれたが、地下鉄の出入り口を塞ふさがれたのではどうしようもない。

万事休すか。

いや、まだ何か手段があるはずだ。

小日向はかつてないほど頭を捻ひねって考えるが、妙案が思いつかないまま時間だけが過ぎていく。

久ジイたちが飛び込んでから一時間後、異変が起きた。京成上野駅の方角から大勢の人影とライトの輪が揺れながら迫ってくる。だがどれだけ近づいても足音が大きくなるのは、さすがに訓練された警察官といったところか。

ライトの一つが小日向の顔を捉えた。

「ご無沙汰していましたね、小日向さん」

ライトの主は柳瀬やなせだった。隣には栲矢くぬぎやの顔も見える。

やがて警官隊の数は四十人程度と分かる。一対一で対応しても余る人数だ。

「あなたが彼らの水先案内人を務めていたとは。移動先のチョイスが絶妙なのは、地下住人の中で廃駅に詳しい者がいるからだと目星はつけてたんだが」

柳瀬はネズミをいたぶる猫のような顔をこちらに向ける。昔から警察官という職業があまり好きではなかったが、この瞬間から嫌いになった。

「こちらは老人や病人ばかりの三十数名に対して、こちらは四十名。いくら何でも気合いが入り過ぎてやしませんか」

「テロリスト集団を検挙するんです。これだけの人数でも足りないくらいです」

いくら挑発だと分かっているも腹に据えかねた。

「柳瀬さん。彼らを見てください」

小日向は「ヘクスプローラー」の面々を指差す。

「ここにいる人たちのどこがテロリストですか。皆、皮膚病を患わづらって碌ろくすっぽ地上にも出られない。そんな人たちがどんなテロを引き

起こすっていうんですか」

「ニュースを見ていないのか。妊婦だろうが子供だろうが、腹に爆弾を抱えたら立派なテロリストになる。しかも地下住人たちは日本政府に並々ならぬ敵意を持っている。そこにいる老人たちが明日、国会議事堂の中で自爆テロを起こしたとしても、わたしたちはこれっぽっちも驚かない」

無茶な理屈だと思った。

「仮にその老人たちが実力行使に出なくても、原発被害者の支援者を隠れ蓑にした左翼が早晚似たようなことを画策する」

「言っていて支離滅裂しりめつれつだとは思わないんですか」

「それはな、小日向さん。あなたの思考が平和脳だからだ。世界の紛争地域やテロの現場では、その支離滅裂が日常になっている。さあ、皆と一緒に来てもらいましょうか」

柳瀬と柵矢、そして警官隊がじりじりと歩み寄ってくる。逃げ場はない。ここで儂い抵抗はかなをしたところで、全員逮捕は時間の問題だろう。

いっそ警察官相手に大立ち回りでもしてやろうか——普段であれば想像すらしらないであろう考えに惑う。自分の中に棲すんでいた暴力性にも驚く。

少しでも抵抗すれば公務執行妨害罪に問われるのも承知している。

これ以上罪を重ねるなという声と、何としても一矢報いっしむくいたい気持ちが渦を巻く。

その時だった。

「はい、そこまで」

いきなり警官隊の背後から声が聞こえた。見れば、これもライトを持った数人の人影だった。

「誰だ」

誰何すいかする柳瀬に対して、返ってきた言葉はこの場に不似合なほど平穏な響きだった。

「身内っちゃあ身内ですよ。公安第一課さん」

やがて光の輪の中に現れたのは刑事部の春日井だった。その後ろには香田の姿も見える。何と担当刑事の勢揃いではないか。

「捜査一課が何の用ですか。我々は現在、テロの可能性を持った集団を逮捕しよう」と

「あくまでも可能性ですよね。令状はお持ちですか」

柳瀬は急に口籠くちどもる。つまりこの捕物が逮捕以前のものであったことの証だった。

「総勢百人にも及ぶ人間の令状など一日やそこらで取れるものじゃない。実質は事情聴取のための任意出頭か、あるいはそれ以外の目的だったんじゃないんですか」

「そっちの目的は何だ。まさか我々の妨害をするために」

「捜一にそんな暇なんかありませんよ。我々の目的はいつでもどこでも犯人検挙です」

「答えになっていない」

「だから犯人逮捕と、証言集めのためにやってきたんです。少なくとも、そちらの理屈よりはずっとスジが通っている」

そう言いながら柳瀬の脇をすり抜け、間宮の前に立った。

「間宮六輔。黒沢輝美殺害の容疑で逮捕する」

一瞬、何を言っているのか理解できなかった。

間宮が輝美を殺しただと。

面食らったのは小日向だけではなく久ジイと香澄、その他の（エクスプローラー）も啞然^{あぜん}としていた。

「被害者が死亡する直前まで萬世橋駅付近にいたのは分かっている。そこで現場を隈なく探してみると、凶器と思わしきコンクリート片を発見したんです。そのコンクリート片には被害者の血痕^{けっこん}とともに別のものも検出されました。それが何だか、間宮先生には身に覚えがありませんか」

問われた間宮の表情は凍り付いていた。

「百人から成る（エクスプローラー）とわたしを隔^{へだ}てるものは医師という職業だ。大方コンクリート片に消毒薬か何かの薬剤でも附着

していたのだろう」

「慧眼けいがんですな。取り調べで要らぬ遠回りをしなくて済む」

香田が有無を言わせず、間宮に手錠を掛ける。かちりと音がすると、間宮はこちらに泣き笑いの顔を向けた。

「彼女が（エクスプローラー）の情報を送信しているのを偶然みとが見咎めた。宇賀神うがじんから同じ被災者として紹介された理由が遅まきながら理解できた。かっとなってしまっただね。気づいた時には、彼女はもう倒れていた」

「ま、詳しい話は署の方でゆっくりと。ああ、他の方たちもわたしたちについてきてください。証言集めだけですから拘束するような真似はしません」

「ちよつと待て」

踵きびすを返そうとする春日井に柳瀬が食ってかかる。

「いい気になるな。折角人が追い詰めた獲物を横から搔かつ攫さらうつもりか」

「獲物とか搔つ攫うとか人聞きがよくないですな」

春日井は暖簾のれんに腕押しといった体ていで、柳瀬の抗議を受け流す。

「その様子ではご存じないらしいが、今ネットでは公安陰謀説なるものが、まことしやかに囁ささやかれていますよ」

「何だと」

「地下に居住するしか手段のない皮膚病患者。ところが元々の原因を作った政府がその存在を消すために、公安部を地下に放った……トンデモな陰謀説だが、それを拡散させている主がちゃんとした公務員で、しかも瀬尾という実名を名乗っている。地下鉄の出入り口に警官を配置したことも信憑性しんぴようせいが増した一因だ。一時的なものになるかどうかはさておき、公安部にもキツイ風が吹きつけるでしょうな」

柳瀬はもうひと言も発しなかった。

やがて小日向たちは春日井に先導されて警視庁へと向かった。

警視庁で春日井から訊かれたことは大した内容ではない。事件当日、間宮がどこにいたか、そして輝美の死体を最初に発見したのは誰か。小日向については輝美の死体遺棄を引き受けた経緯をとことん聴取された。(エクスプローラー)に取り込まれたかたちの小日向に対する物腰は存外に柔らかかで、取り調べ中の春日井ですらこんなことを言う。

「死体遺棄は三年以下の懲役ちやうえきなんですけどね。あなたの場合は地下住人から押しつけられたという事情もあり、世間の同情も厚いので腕のいい弁護士に依頼すれば執行猶予くらいは勝ち取れるかもしれないね」

「そうでしょうか」

「逆説的な言い方になりますかね。これが殺人事件でなければ、我々刑事部だってこんなに強引には動けなかったかもしれない。ま、怪我の功名ですか」

春日井はその他にも、今回の逮捕劇について色々と打ち明けてくれた。捜査情報でもあり全てではないにしろ、小日向には色々と考えさせられる内容だった。

同じ警察組織でありながら刑事部が公安部を出し抜けたのは、やはり政治的な背景があったのだという。つまり公安部を動かしたのが政策評価審議会の宇賀神なら、警視庁に圧力をかけて刑事部を動かしたのも同じ審議会に名を連ねる警察官僚の某氏だった。この某氏というのが与党第二派閥の領袖りょうしゅの手駒であり、早い話が曾根官房長官の失脚を狙った妨害工作だったらしい。

小日向にとって何より驚いたのが某氏の素性だった。名前を教えられてもピンとこなかったのだが、写真を見せられて仰天ぎょうてんした。何と〈中野レールウェイ〉の常連で、いつも鉄道模型に熱心な愛情を注いでいた紳士ではないか。客同士で素性を明かすことはなかったが、同好の士にまさかこんな人物がいたとは意外だった。小日向がマスターにSOSを発信した時点で、某氏は事態の收拾に乗り出したのだらう。

公安部に身柄を確保されていた者も含め、(エクスプローラー)は全員、都内の皮膚科に入院させられた。乾皮症かんびしじょうの治療法は見つかっていないものの、その入院・治療費用は国が負担すべきという声も上がっている。総裁選を間近に控えた各候補者が世評に逆行するよくな方針を打ち出すはずもなく、気運は久ジイたちにとって吉と言えた。

いずれにしても(エクスプローラー)たちは自由と引き換えに身分と医療の保証を得た。それが幸せなのか不幸せなのか、小日向には判断ができなかった。

4

小日向が保釈されたのはそれから四日後のことだった。証拠隠滅の惧おそれがないこと、瀬尾をはじめとした有志が保釈金を募ってくれたお蔭おかげだった。

本来であればお礼がてら瀬尾たちに挨拶するのが筋なのだが、先約がある。小日向は都内の病院に入院させられた香澄の病室を訪れた。

「久しぶりだな」

そう声を掛けても香澄は浮かない顔をしていた。

「どうした。皮膚科じゃ都内でも有名な病院らしいじゃないか」

「ここには久ジイも永沢さんもない」

「しようがないさ。へクスプローラー〱百人を全員収容できる病院なんてなかなかないからな。だけど仲間内でいつでも連絡取れるだろ」

「病院内はケータイ使えないところが多いのよ。それに一日の大部分はベッドの上だし」

「折角国が手の平を返したんだから、厚意に甘えておけよ。それとも柔らかいベッドの上より、あの暗い地下の方が住み心地がよかつたとしても言うつもりか」

返事に窮するかと思っていた香澄の反応は意外だった。

「地下の方がずっとよかつた」

「おいおい」

「不便で光の射さない生活だったけど、仲間がいたもの。自分と同じ痛みを持つ人が隣にいたもの」

贅沢、という言葉は喉の奥に押し込んだ。短い期間だったがへクスプローラー〱たちと同じ時間を過ごした小日向は、香澄の気持ち分かるような気がする。

「これはまだ案の段階なんだけど、政府は原発被害と皮膚病を患った元八ヶ部町の住人の受け皿を検討しているらしい。今のところは

国民に向けたリップサービスだろうけど、マスコミが（エクスペローラー）の後追い記事を書き続けるなら、満更夢物語でもない。他力本願は性に合わないだろうけど、希望を持つのは悪いことじゃない

ベッド上の香澄はそれでも不服らしく、くるりとそっぽを向く。

しかしそっぽを向いたのには別の理由があった。

「……どうして小日向さんと呼んだか分かる？」

「うーん、苦楽をともにした仲間に会いたかったから」

「違う」

「じゃあ、何故だよ」

「楽になりたかったから。多分」

「理解できるように話してくれないか」

「輝美さんを殺したのは、あたしよ」

一瞬、冗談かと思った。

だが、生憎と香澄はそんな冗談を言う人間ではない。それは小日向がよく知っている。

「輝美さんが（エクスペローラー）の情報を送信しているのを目撃したのは、あたしなのよ。開けっぴろげで、どんなことでも相談できるお姉さんみたいな存在だったから余計に腹が立った。すぐ口論になって、輝美さんが自分から刑事だと名乗った。きっと罪悪感が

あったんだと思う」

「彼女の頭をコンクリート片で殴ったのは君だったのか」

「無我夢中だった。気がついた時には、もう倒れていた。それで神田駅の方に逃げたの。ちょうど買い出しを頼まれていたし」

そうか、と小日向は以前の記憶を引き摺り出す。輝美の死体が発見されて皆が右往左往している時も香澄の姿はなかった。買い出しに行っているというのがアリバイのようになっていたが、犯行はその前に行なわれたのだ。

「じゃあ、どうして間宮先生がコンクリート片を握ったことになっているんだ。いや、間宮先生は自分が殺したんだと自白までしている」

「^{かば}庇ってくれたんだと思う」

香澄の声は消え入りそうだった。

「買い出しから戻ってきてあたしが驚いたのは、輝美さんの死体が移動していたから。本当はもっと神田駅寄りにあっただはずなんだけど、いつの間にか萬世橋駅寄りになっていた」

未だ混乱から解けきらぬ頭で考える。輝美の死体を移動させたのも間宮なら、凶器となったコンクリート片を持ち帰ったのも間宮だろう。理由は見当がつく。香澄の犯罪であることを隠すためだ。

落ちていたスマートフォンが発信記録と警察手帳で輝美の素性と

潜入目的は一目瞭然だ。同時に輝美と香澄が争った理由も透けて見えてくる。

「間宮先生、自分が犯人だと名乗り出るつもりまではなかったと思う。でもあの時、刑事部の人たちに主導権を渡すために、咄嗟とっさに嘘を吐いたんじゃないかな」

「……香澄ちゃんの犯行を隠す、というのは本気だったろうね。そうでなきゃ、死体もろとも凶器まで移動させるはずがない」

「どうして間宮先生にそこまでする義務があるのよ」

「当時、宇賀神某なにかしの誘いに乗って輝美さんを（エクスプローラー）に引き入れてしまったのは間宮先生たちだったからね。責任を取るというのはちよつと違うけど、先生なりにけじめをつける行為だったんじゃないかな」

人の心は悪魔でも分からない。間宮の気持ちをあれこれ類推するのは気が引けたが、今は香澄のために許される行為だと思った。

しばらくすると、香澄の肩が小刻みに震え始めた。

指を触れることも声を掛けることもできず、小日向はじつと待ち続ける。

やがて肩の震えが治まった頃、ようやく話し掛けた。

「これで楽になったか」

「……少し」

「よかった」

「ねえ、小日向さん。あたし、どうしたらいいと思う？」

一番恐れていた質問だった。十七歳の女の子の将来を決めるような回答は腰が引ける。

それでも相手が真摯しんしに訊いているのなら、真摯に答えるのが義務というものだ。

「日本の警察は有能だ。場当たりみたいな偽装工作でいつまでも騙されるもんじゃない。僕と永沢さんの偽装だって、あつという間にバレたしね。だから輝美さん殺しの真犯人にも早晚気づくと思う。もっとも間宮先生がどこまで頑張るかという話でもあるんだけど」

「どうしたらいいのかって訊いてるのっ」

「真実を話さないのは逃げることと一緒に。もう逃げ回るのには飽きただろ」

香澄はそっぽを向いたまま、こちらを見ようとしない。表情は分からない。だが逡巡しゆんじゆんしているのは分かった。

「また連絡くれよ。僕もどんな風になるのか見当もつかないしな。じゃあ」

病室を出る際にちらりと振り返ると、片手が別れを告げるように上がっていた。